



◆ XWN-18150

WOLFGANG AMADEUS MOZART

(1756-1791)

*STRING QUARTET K.80**DIVERTIMENTO K.136**DIVERTIMENTO K.137**DIVERTIMENTO K.138*

BARYLLI QUARTET

Recorded: 1955



◆ XWN-18591

WOLFGANG AMADEUS MOZART

(1756-1791)

*STRING QUINTET K.46**STRING QUARTET K.173**STRING QUINTET K.174*

BARYLLI QUARTET

Recorded: 1955



BARYLLI QUARTET

MOZART

STRING QUARTETS: G MAJOR, K.80 B FLAT MAJOR, K.137
 D MAJOR, K.136 F MAJOR, K.138
 STRING QUINTET: B FLAT MAJOR, K.46

with WILHELM HÜBNER, 2nd Viola

モーツァルト WOLFGANG AMADEUS MOZART (1756-1791)

弦楽四重奏曲第1番ト長調 K.80(73f)

STRING QUARTET NO.1 IN G MAJOR K.80 (73f)

- ① 第1楽章:アダージョ
1st mov.: Adagio 5:48
- ② 第2楽章:アレグロ
2nd mov.: Allegro 3:45
- ③ 第3楽章:メヌエット
3rd mov.: Minuetto 3:40
- ④ 第4楽章:ロンドー
4th mov.: Rondeau 3:41

ディヴェルティメント 二長調 K.136(125a)

DIVERTIMENTO IN D MAJOR K.136 (125a)

- ⑤ 第1楽章:アレグロ
1st mov.: Allegro 4:24
- ⑥ 第2楽章:アンダンテ
2nd mov.: Andante 6:15
- ⑦ 第3楽章:プレスト
3rd mov.: Presto 2:51

ディヴェルティメント 変ロ長調 K.137(125b)

DIVERTIMENTO IN B FLAT MAJOR K.137 (125b)

- ⑧ 第1楽章:アンダンテ
1st mov.: Andante 5:15
- ⑨ 第2楽章:アレグロ・ディ・モルト
2nd mov.: Allegro di molto 2:39
- ⑩ 第3楽章:アレグロ・アッサイ
3rd mov.: Allegro assai 2:13

ディヴェルティメント へ長調 K.138(125c)

DIVERTIMENTO IN F MAJOR K. 138 (125c)

- ⑪ 第1楽章:アレグロ
1st mov.: Allegro 3:50
- ⑫ 第2楽章:アンダンテ
2nd mov.: Andante 4:01
- ⑬ 第3楽章:プレスト
3rd mov.: Presto 1:56

弦楽五重奏曲 変ロ長調 K.46

(偽作:「セレナード 第10番 K.361(第1,2,3,7楽章)」からの弦楽五重奏編曲(編曲者不明))

STRING QUINTET IN B FLAT MAJOR K.46

[composer unknown]

arrangement for string quintet from "SERENADE No.10 K.361 (1st, 2nd, 3rd & 7th mov.)"

- ⑭ 第1楽章:ラルゴ・アレグロ・モルト
1st mov.: Largo-Allegro molto 8:29
- ⑮ 第2楽章:メヌエット
2nd mov.: Menuetto 6:05
- ⑯ 第3楽章:アダージョ
3rd mov.: Adagio 4:58
- ⑰ 第4楽章:ロンド:アレグロ・モルト
4th mov.: Rondo: Allegro molto 3:14

バリリ四重奏団 BARYLLI QUARTET

ワルター・バリリ(第1ヴァイオリン)

オットー・シュトラッサー(第2ヴァイオリン)

ルドルフ・シュトレック(ヴィオラ)

エマヌエル・ブラベッツ(チェロ)

Walter Barylli (1st violin)

Otto Strasser (2nd violin)

Rudolf Streng (viola)

Emanuel Brabec (cello)

- ⑭~⑰ ヴィルヘルム・ヒューブナー(第2ヴィオラ) Wilhelm Hübner (2nd viola)

バリリ SQ は、史上最も理想的な

室内楽の演奏団体だった

最近の弦楽四重奏団をインタビューすると、必ず次のような答えが返ってくる。「私たちは十分話し合いながら、音楽を作っていく」。しかし、この「話し合い」という言葉にはまた、ある種の危険性も含んでいる。なぜなら、芸術をする上で、この言葉は「平均化する」ということにもつながるからである。往年の名団体と言われたカペー、ブッシュ、レナーなどは、ほんの一瞬聴いただけでもすぐに彼らの演奏と判断できるほどの強烈な個性を持っていた。このような個性は話し合いの結果に生まれたのではなく、ひとりの人間の（この場合は各団体の第1ヴァイオリン奏者）、いわば強引とも言えるリードの上に成り立っていたのである。もちろん強引とはいっても、第2ヴァイオリン以下の3人が第1ヴァイオリン奏者の優れた音楽性に深く共感し、4人が一致協力する体制でなければ目標には達しないことは言うまでもない。

バリリ弦楽四重奏団の演奏にも、一聴して瞬時に判断できるほどの濃厚な色彩がある。しかし、バリリの演奏にはカペーなどのように第1ヴァイオリン奏者が絶対者のように君臨した雰囲気はない。彼らに絶対者がいるとすれば、それはウィーンの伝統であろう。彼らの演奏は、ウィーン流儀を身につけた4人が、同じ呼吸、同じイメージで、それこそ、あうんの呼吸で行ったような自然さがある。むろん、彼らが練習の時に、たいした打ち

合わせもせずに、お手軽に事を運んだことは絶対にありえない。だが、バリリの演奏そのものからは、規則や論理的構築といった、ある種の堅苦しさや禁欲的な匂いは一切感じられないのである。

伝統を受け継ぎ、絶対者が支配するタイプのアンサンブルは、今やひと昔前のスタイルとされている。またそれは、時には価値の低いものとされる場合もある。しかし、今回新たにCDとなったバリリ弦楽四重奏団の演奏を改めて聴き、古めかく感じるどころか、彼らこそ最も理想的な室内楽の演奏団体のひとつだったと確信したのである。つい最近亡くなった指揮者のチェリビダッケは、「今や世界中のオーケストラは、より速く、より大音量で弾く競争をしている」と述べた。この言葉は現代の弦楽四重奏にもあてはまるのではないだろうか。大きなホールに響かせるためには、おのずと大きな音が必要となり、その結果に親密な気分は失われる。あらゆる時代、地域の作品に対応するためにニュートラルな色彩が好まれ、聴衆の精密さに対する要求はますますエスカレートするばかりである。こうして、似たような顔を持った団体が溢れかえるのである。このような傾向は、果たして歓迎すべきだろうか。また、室内楽は本当に進歩しているのだろうか。バリリの演奏を聴いていると、その答えははっきりと「否」と言える。

【平林直哉】

●曲目解説

弦楽四重奏曲第1番 ト長調 K.80(73f)

1769年12月、1ヵ月後に14歳になろうというモーツァルトは、父レオポルトとともに初めてのイタリア旅行に出かけた。翌年、主要な目的地の1つであるミラノに約2ヵ月滞在した後、モーツァルトは3月15日に同地を出発するが、その晩、ローディという町の宿で書き上げられたのが、この彼の最初の弦楽四重奏曲である。器楽の盛んだったミラノの音楽的環境が、モーツァルトに新たなジャンルでの創作を促したのであろう。

曲は当初、第4楽章を欠く、3楽章からなるものであった。この3楽章制というのは、第7番までの弦楽四重奏曲と共通のものである。第4楽章が付加されたのは1773年以降のことと考えられている。

ディヴェルティメント 二長調 K.136(125a)

K.136～138の3曲のディヴェルティメントは1772年のはじめ(1～3月頃)、ザルツブルクで作曲された。弦4部のために書かれたこれら3曲は、どのような編成で演奏すべきかが問題となる。「ディヴェルティメント」という表記はモーツァルトの手によるものではないが、当時この語はソロ編成の楽曲を指すために用いられており、それに従えば弦楽四重奏用の曲ということになる。一方、自筆譜における楽器の指定からは、むしろ合奏曲として書かれたことがうかがえる。ただし同じ問題は、続く「ミラノ四重奏曲」(K.155～160)においても指摘されるものであり、当時、モーツァルトは両者をそれほど厳密に区別していなかったとも捉えられる。

連作の第1曲である二長調の作品は、モーツァルトが10代に書いた器楽曲の中でも、現在、演奏されることの最も多いものに属する。ディヴェルティメントの日本語訳である「嬉遊曲」という語にまさにふさわしい内容を

持つ作品である。

ディヴェルティメント 変ロ長調 K.137(125b)

ディヴェルティメント3連作はいずれも3楽章からなるが、他の2曲が急緩急の「イタリア序曲」風の構成を採っているのに対し、この曲は緩徐楽章が冒頭に置かれている。何か物語でも始めるような開始が印象的である。第2、3楽章は急速な音楽が続くが、拍子が異なるため単調な感じはしない。

ディヴェルティメント へ長調 K.138(125c)

第1曲同様の構成による作品であるが、第2楽章の陰影の深さ、第3楽章における各声部の独立的な扱い方に特徴がある。

弦楽五重奏曲 変ロ長調 K.46 (偽作)

モーツァルトの、12の管楽器とコントラバスのためのセレナード K.361(370a)の最初の3つの楽章と第7楽章(終楽章)を弦楽五重奏用に編曲したもの(原曲は1780年代前半に成立)。編曲者は不明である。

これをモーツァルトの真作と見たケッヘルは、手稿譜に「1768年1月、ザルツブルク」とあることから、46の番号を付し、K.361はこれを基にしたものと推測したが、様式的に信憑性は全くない。ケッヘルの目録では第3版以降、この曲を削除している。

編曲の仕方も特に工夫は見当たらず、拙い点が多い(CDの演奏は多数修正を施した版を用いており、原曲の味をより正確に伝えるものとなっている)。

【松田 聡】

(インデックスの楽章表記はオリジナルLPに基づいています)



バリリ四重奏団 (1945-1959)
BARYLLI QUARTET
(左から) Walter Barylli, Rudolf Streng, Otto Strasser,
Emanuel Brabec

〈1945年2月21日〉
ムジークフェラインのブラームスザールでデビュー・コンサート
を開催

● members of the QUARTET (第1期)
ワルター・バリリ (第1ヴァイオリン)
Walter Barylli (1st violin)
ワルター・ウェラー (第2ヴァイオリン)
Walter Weller (2nd violin)
アルフォンス・グリュンバーク (ヴィオラ)
Alfons Grünberg (viola)
ヘルマン・ベッケラート (チェロ)
Hermann Beckerath (cello)
〈1945年3月〉
戦争が激化したため活動停止

〈1945年末〉

戦後初、活動を再開

● members of the QUARTET (第2期)
ワルター・バリリ (第1ヴァイオリン)
Walter Barylli (1st violin)
ヴォルフガング・ポドゥシュカ (第2ヴァイオリン)
Wolfgang Poduschka (2nd violin)
アルフォンス・グリュンバーク (ヴィオラ)
Alfons Grünberg (viola)
ハンス・チェツカ (チェロ)
Hans Czegka (cello)
〈1951年8月13日〉
ザルツブルク音楽祭で新メンバー(シュナイダーハン四重奏団の
メンバー) と初のコンサートを開催

● members of the QUARTET (第3期)
ワルター・バリリ (第1ヴァイオリン)
Walter Barylli (1st violin)
オットー・シュトラッサー (第2ヴァイオリン)
Otto Strasser (2nd violin)
ルドルフ・シュトレック (ヴィオラ)
Rudolf Streng (viola)
リヒャルト・クロツチャック (チェロ)
Richard Krottschak (cello)

〈1955年〉

チェロがブラベッツに交代
● members of the QUARTET (第4期)
ワルター・バリリ (第1ヴァイオリン)
Walter Barylli (1st violin)
オットー・シュトラッサー (第2ヴァイオリン)
Otto Strasser (2nd violin)
ルドルフ・シュトレック (ヴィオラ)
Rudolf Streng (viola)
エマヌエル・ブラベッツ (チェロ)
Emanuel Brabec (cello)

〈1957年〉

初来日

〈1959年〉
四重奏団解散 (バリリ右肘故障のため)



1995年、ウィーンにて

ヴィルヘルム・ヒューブナー (第2ヴィオラ)
(1914-1996)

WILHELM HÜBNER (2nd viola)

1914年ハンガリー生まれ。ウィーン音楽アカデミー (現音
大) とウィーン大学医学部に学ぶ。1954年以来、ウィーン・
フィル第2ヴァイオリン首席、1963～4年にはN響のコン
マスを務めた。1972～8年、ウィーン・フィル会長。バリ
リ (バリリ SQ 1st vn.)、およびティツェ (ウィーン・
コンツェルトハウス SQ 2nd vn.) とは、マイレッカー (元
ウィーン・フィル・コンマス) の同門で親しく、ウエスト
ミンスターには両SQ との録音を多くのこしている。1996
年6月1日、急逝。

■ original recordings
Music Supervisor: Kurt List
Recording Engineers: Karl Wolleitter, Herbert Zeithammer, Panytsch
Recording & Editing Engineer: Gerhard Schuler

■ reissue
Supervisor: Hiroyuki Iwata (MCA Victor, Inc., JAPAN)
Coordinator: Eiko Ishikawa (MCA Victor, Inc., JAPAN)

Mastering Engineer: Erick Labson (MCA Music Media Studios, U.S.A.)
Sound Adviser: Fumio Hattori (JVC Victor Studios, JAPAN)
Tape Organizer: Mary Capozzi (MCA Tape Library, U.S.A.)

Total Design: Akane Shirouzu

Special thanks to Paul West, Nick Dofflemyer (MCA Music Media Studios, U.S.A.),
Randy Aronson (MCA Tape Library, U.S.A.),
Gordon Skene,
Matt Tuna